
不可思議の前に七月

シラカベヒロ氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不可思議の前に七月

【Nコード】

N5664J

【作者名】

シラカベヒロ氏

【あらすじ】

七月那由他が、不思議な出来事に巻き込まれたり、巻き込まれなかったり、巻き込まれる前に受け流したりする連作学園奇譚。どこからでも好きなお話からお読み下さい。

サーカスが来て頬がはれた話（前書き）

この短編連載は思いついた時にざくつと書いてみたりするぐらいな
スタンスなので、全然更新されないこともあるかも知れませんがな
まぬるく見守って頂けると幸いです。

サーカスが来て頬がはれた話

「私、サーカスに売られちゃったんだ」

朝のホームルーム前。隣の席の佐藤さんがにこにこしながらそんなことを言うので僕は、

「へえ」

と軽く返した。我ながらずいぶん適当な相槌だと思ったけど、佐藤さんはなぜか嬉しそうに笑っていた。その笑う白い歯や頬に窓から日が射して余計嬉しげに見えた。

「七月くんって彼女いるの？」

ぶしつけな質問に戸惑いながらも、いないのでここは見栄を張らずに、

「いないよ」と答える。

「じゃあ一枚だけあげるチケット。今週の日曜五時からだから」

佐藤さんは薄汚れた紙切れを一枚僕に差し出した。ミラクル小林大サーカス団。なんだかぱっとしない名前だ。見に行くかどうかまだわからないけど、貰っておいて損なものでもないのでありがたく頂戴した。

「佐藤さんは何をやるの？」

「空中ブランコだよ」

入団し立ての子にずいぶん無茶させるサーカスだ。人手不足なのか、それとも彼女に何かを見出したのか。

「でも、なんでサーカスに？」

口に出してからまずいと思ったが遅い。佐藤さんの顔がちよっと曇った。

「うーん。理由は色々あるんだけど、お金に困ってたからね、うち

「そか」

「お母さんが、優子、売春かサーカスか無理心中、どれがいい？
なんて言うもんだから。そりゃあサーカス選ぶでしょ普通誰でも」

あつけらかんと佐藤さんは言った。確かにそれなら僕もサーカスを選ぶ。というか選択肢の幅あまりに狭くないか佐藤さんのお母さん。もうちょつとバリエーションあってもいいのでは。僕は主婦の発想の限界を垣間見た。

「あ、でさ七月くん」

「なに？」

「今日の放課後暇だったら、練習に付き合ってくれないかな」

「練習って空中ブランコの？」

「うんそう」

「いいけどどこで？」

「公園すぐその。じゃあ約束ね」

真っ白い歯を見せながら佐藤さんは笑う。果たして公園なんかで空中ブランコの練習が出来るのかと思ったけど、おそらく何か練習用器具が組んであるんだろう。でも僕は何をどう手伝えいいのか。僕も乗らなきゃいけないなんてことになったらどうするか。

安請け合った自分にちよつと後悔したけれど、チャイムが鳴りほどなくしてホームルームが始まったので話を白紙に戻せずじまいだった。担任が喋っている間、僕は窓外を見つつ、二階でも結構高いのに空ブラなんてと不安を膨らませた。

放課後、佐藤さんと一緒に公園へ向かった。到着したそこは、どうしようもなくどうしようもない公園で、僕が今日授業中ノートの片隅に描いた空ブラ特訓マシーンらしきものはどこにもなかった。

「ここで、どうやって」

と僕が質問しているその最中、佐藤さんは鞆をばさっと投げ捨て、ブランコ（空中じゃないごく普通な）に向かって走り出した。まさかと思ったが、とりあえず僕も後を追ってブランコのそばへ向かった。そびえるそれは夕日が当たって厳かだった。

「じゃあ練習するから見ててね」

軽くそう言い、佐藤さんはブランコの椅子へ腰掛け、ゆっくり前

後させ始めた。それを見ながら僕は考えた。なるほど僕が知らないだけで、サーカス業界の人は普通のブランコをマシーンとして使用する術を知っているんだな。しばらく待てば目の前で驚くべき漕ぎテク（猛スピードでぶんぶん回り始めたり）が繰り広げられるに違いない。

僕はそれからまじまじ見続けたが、いつまでたっても佐藤さんはきこきこ緩やかに漕ぐだけだった。下手したら幼児の方が激しく漕ぐだろう。しまいには、

「七月くんもやろうよ」

などと言い出した。僕はおそろおそろ佐藤さんの隣のブラ椅子に座り、ゆっくり漕いだ。意外と楽しかった。

「意外と楽しいね」

「ね」

きこきこ二時間くらい漕いだ辺りで佐藤さんは椅子からすたと立ち上がった。ので、僕も立ち上がった。とくに日は沈んでいた。「じゃあまた明日もよろしくね」

にこにこしながら佐藤さんが言う。こんな簡単なことで彼女の役に立つというのに誰が断るだろう。僕はこくりと頷いた。えへへ、と佐藤さんが笑った。風がすかっと吹き、揺れるブランコをもうちょい揺らした。

それから来る日も来る日も、僕と佐藤さんは放課後二人でブランコを漕いだ。漕いでる間、佐藤さんはあんまり喋らなかった。ので僕もあんまり喋らなかった。ちらっと横目で見る佐藤さんはいつも遠くを見ていた。そうすることが何か空中ブランコ実践に役立つのかも知れないと思った。ただ寂しいだけかも知れないと思った。

かくして日曜がやってきた。僕は緊張していた。なぜなら結局、佐藤さんは普通にきこきこ漕ぐ以外のブランキングをしなかったからだ。彼女のそれは立ち漕ぎさえしないというゴールド免許っぷり

だった。みっちり毎日漕ぎまくったとは言え、果たして彼女は本番を乗り切れるのだろうか。チケットを握り締め、僕は会場へ向かった。

道中、僕はひとつの可能性を考えていた。実はサーカスなんてなくて、佐藤さんはただ家庭に問題ある薄幸の少女で、苦い現実から少し逃避したくて直帰せず寄り道したただけだ。で、僕のことがちょい好きで一緒にいて欲しくて妙な嘘をついて僕の気を引いた。二人ブランコを漕ぐその時間だけが彼女の唯一の幸せだった。どうだ。これなら僕の手元にあるチケットがどう見ても大学ノートの切れ端にサインペンで書いたハンドメイド的なものである理由もつくじやないか。

自分の名推理に酔いしれながら会場へたどり着くと、果たしてそこにはこぢんまりとしたテントが建っていた。びっくりした。ほったをつねつても目が覚めなかったので仕方なくチケットを受付の人へ渡し中へ入った。中にはそこそこ人がいてまたびっくりした。びっくりしてたら開演した。

内容はと言うと、これがなかなかどうして普通に面白く、ライオン使いにピエロの玉乗り、子馬の曲芸にナイフ投げと、テントのこぢんまり加減からは想像もつかない豊富なラインナップで僕はひどく童心に帰ってしまった。

「ラストはお待ちかね、空中ブランコです」

団長とおぼしき紳士のものものしいアナウンスで我に返った。そうだ、佐藤さんだ。佐藤さんを見に来たんだ僕は。ていうか大トリなんだ、すごいな入団して間もないと言うのに。

テント内にそびえる高いポールの上方をライトがズバツと照らす。そこにいるのは、大トリにふさわしい派手な服を纏った佐藤さん、といきたいところだったが現実には学校の体操着つまりもっさりした赤ジャージを着た佐藤さんだった。せっかくだからもさもさではなくきらきらの衣装用意して貰えばよかったのと思いつながらもほんとに佐藤さんが出てて少々驚いた。

「それではどなたかに彼女のアシスタントをして頂きたいと思います」

団長らしき紳士（おそらく本サーカスの名前となっているミラクル小林氏だろう）の発言の意味は全然わからなかった。アシスタントってなんだ。佐藤さんが乗ってる方じゃない側のポール頂上に誰もいない点がなんとなく気になってはいたんだけど、まさかそこに行けそしてブランキングしろっていう視聴者参加型イベントは催さないだろう。

「じゃあそこのおぼっちゃん」

ミラクル小林が一人のおぼっちゃんを指差した。おぼっちゃんは席を立ち、小林に誘導されるがままに前へ出て階段を上り歩を進め、佐藤さんが乗ってない側の高いところに到着した。おぼっちゃんの度胸に僕は感服した。

「せーの」

小さく呟くような声なのに、遠い遠い僕のところまでその佐藤さんの声は聞こえた。それを合図に二人は空中でのブランキングを始めた。きこきこではなく、ぐわんぐわんという激しいそれ。

ふわっと宙に舞う佐藤さん。目が合った気がした。

次の瞬間、二人の立っている場所は最初のそれと入れ替わっていた。鳴り止まぬ拍手喝采と深々おじぎする佐藤さんとおぼっちゃん。ほっぺたをつねってもやっぱり目は覚めなかった。仕方なくずつつねりながらテントを出た。頬皮が入場前より伸びていた。

「七月くん」

頭を電柱にガンガン打ちつけている僕を呼び止めたのは、体操服姿の佐藤さんだった。

「頭ぶつけて何してるの？」

「つねるより効果的かなって思って」

「ふうん。そんなことより見に来てくれてありがとう」

「うん、いや楽しかったよ本当に凄かったし」

「七月くんが練習付き合ってくれたおかげ」

「そか」釈然としないけどまあいい。

「でも佐藤さんも凄かったけどあのおぼっちゃんも凄かったね」

「うん。なんかあんまりに才能あるから団長が買ってたよあの子のこと両親から」

「へえ」どこの家庭もお金には困ってるんだな。こんなにあっさり人身が売買されて。

「それより私、七月くんに大事な話があって」

「なに？」

「さよならなの」

「さよなら？」

「サーカスだから次の町に行かなくちゃだから、だからさよなら」
「そか」

理不尽に思ったのも束の間、よく考えればもつともな話ではある。いつまでも一つの町に留まるサーカスなんてサーカスじゃない。サーカスは旅してなんぼだ。その通りだ。その通り。その通りなんだけどわかってるんだけどでもだがしかし。

佐藤さんはすまなそうに静かに微笑んだ。僕はただ黙っていた。黙ってしまった。だって明日から僕の隣は空席だ。ここ最近で一番強くほっぺたをつねってみたけど、ただただ激痛だった。からからした風がぶうぶう吹いた。揺れるブランコが脳裏に浮かんた。

「佐藤優子さんは家庭の事情で急遽引っ越すこととなりました。うんまあ、というかも引っ越してしまっただけだね。本当に急なことでも先生も聞いたのはついさっきで、それより七月どうしたんだそんなにほっぺをぶうつと膨らませて何か先生気に障ること言ったか。それともおたふく風邪か」

担任がうだうだ喋る、今日もいつものホームルーム。家庭の事情ときたか。名実共にミラクル小林大サーカス団は佐藤さんの新家族になったわけだ。だから彼女はもう小林さんだ。こんなとき感傷に

浸るような人間は実にくだらなと思うけど、僕の口からはため息が出る。出てしまったんだからしょうがない。

帰り道、昨日テントがあった場所に行ってみた。もちろんもうテントはなかった。世の中そんなに僕に甘くない。念のため公園にも行った。特に何もなかった。少しだけ期待した自分がバカみたいだったので、腹立ちまぎれにブランコに座ってきこきこやってみた。驚くほど楽しくなかった。

沈みかける夕日を見ながらぼーっと考える。果たしてあのとき、おぼっちゃんが指名されるより早く僕が挙手していたら。そしたら僕は今どこにいただろうか。佐藤さんみたいにふわっと宙を舞えてただろうか。拍手喝采を浴びれただろうか。

日が完全に沈む頃、僕は立ち上がり座っていた椅子をがんと蹴とばした。不規則に揺れながらそれはきいきいと僕を笑い、それで僕はサーカス嫌いになった。なるさそりや。

絶対に始まらない試験勉強

夜中二時過ぎ。普段から殺風景な僕の部屋は、今夜、磨きをかけて殺風景になっていた。

ゲーム、マンガ、小説、図鑑、哲学書、解体新書、六法全書。勉強の妨げになると思われるありとあらゆるものは全て引き出しにしまった。引き出しには鍵をかけて、その鍵はさっき飲み込んだ。更に念には念を入れて今日は一日水以外何も口にしなかったので、鍵が排泄される可能性もない。完璧だ。完璧に整った。

やれる。

僕はこざっぱりした机の上に堂々と一冊の本を置いた。数学。そう、数学だ。明日は数学のテストなのだ。いや、正確に言うなら今日だ。もっと正確に言うなら今からあと七時間後だ。もっともっと正確に言うならあと六時間五十八分と二十四秒後、三秒、二、一、ああ時間ってほんとにどんどん過ぎていくなあ。ほらこうしてる間にもう残りは六時間五十七分と五十秒切ってる、はい残り四十七、六、五、四、三、二、一。

はっと気づくと残り時間はあと六時間。寝ちゃってたらしい。なんでだろう。僕はただ時計の秒針をじっと見てただけなのに、こうやって。こう、ちくたく、ちくたく、ちくたく。

驚きだ。残り時間が五時間半になっていた。すごい。これはすごい発見だ。この世で一番の時間泥棒が、皮肉にもその時を知らせる時計自身だったなんて。それも時計の中で一番細くて頼りない秒針が。こんなやせっぽちで働きの善良市民ミスター秒針がそんな大罪を犯しているなんて一体誰が気づくことが出来ただろう。ああ憎い。勞せず真実を掴み取ってしまう自分の聡明さが憎い。ああ。

とりあえず僕は時計を壁に向かってぶん投げた。そもそも時間なんて携帯でしか見ないのになんで僕、時計なんか持ってたんだろうバカバカしい。まあいい。勉強にとりかかろう。

「なゆたー」

母さんが僕を大声で呼んだ。夜中に時計を壁にぶん投げたら母親が目覚まして怒る。こんな簡単なことに気づけないなんて試験勉強する前にもっと学ばなきゃいけないことがあるんじゃないだろうか僕は。

「ごめん母さん」

とりあえず壁越しに謝罪しておく。母は黙った。

「なゆたー」

今度は父さんが僕を呼んだ。時計の破壊は無口な父親でさえ怒らせる。時計一個がもたらす悪影響は大きい。

「ごめん父さん」

同じく壁越しに謝罪する。父は黙った。さて。

そこで気づく。僕、父親いない。五歳のときに死んだ。じゃあ誰ださっきの声は。

いや待て落ち着け。つい叫びだしそうになった自分の口をとじる。冷静になったら一つの可能性が浮上してくるじゃないか。つまり、近々僕に新しい父さんが出来るかも知れないと。要するにさっきの声は誰だか知らないけど母さんの恋人っていう。ありうる。ありうるけど、それにしても顔も見せずにいきなりファーストコンタクトから僕を呼び捨てにするのはちよつとどうかと思う。父親気取りもはなはだしいんじゃないか。僕はまだお前を父さんだと認めていない。あ。いや、つい父さんって呼んじゃったなそう言えば。やばい、いい気になってるだらうなきつと。

「僕はまだ認めてないからな」

とりあえず壁の向こうにそう宣言しておいた。これで相手もそれなりに反省するだろう。よし。じゃあ始めよう。

と思っただけどまずトイレに行こう。今の状態じゃ集中力は発揮出来ない。一日何も食わなかったぶん、バカみたいに水をがぶがぶ飲んでせいで尿意が酷いんだ今日は。僕は椅子から立ち上がり、そそくさと部屋を出た。

そして数分の後、僕は部屋に戻ってきた。どこにも寄り道することなくスマートにただ用を足してすぐ戻ってきた、数々の誘惑を振り切って。そう、道中には驚くほど沢山の誘惑があった。テレビ、冷蔵庫、雑誌、新聞、おやつ、迷い込んできた犬、一緒に遊びに行かないかと誘いにきた友人、早く寝ろと言いにきた父さん（幽霊だと思う）、すごいでかいムカデ、でかいカマドウマ、でかいゾンビと小さいゾンビ（親子だと思う）、などなど。それら全てを僕は渾身の力で振り切って用を足してきたのだ。この僕の勉強に対する執念。これだけで十分、教師は僕を評価すべきだと思う。テストの点数では測りきれない大事なものを僕は持っているのだから。ああ。そうは言っても勉強しなきゃいけない。悲しいかなテストの点数でしか評価されないのが現代だ。中学校だ。悔しい。下唇を噛みつつ僕は椅子に座った。

ところがどうだ。僕が椅子だと思って座ったのはふかふかのベッドだった。おかしい話だ。確かに僕は椅子に腰掛けたつもりだったのに、その椅子はなぜか目線のまっすぐ先にある。なぜ。

「ははあ」

なるほど。僕は全てを理解した。どうやらベッドまでが僕を誘惑し、勉強を妨げようとしているらしい。でも相手が悪かったなミスターベッド。僕はゾンビの親子や超おもしろなおやつまでも振り切って勉強へ突っ走ってきた男なのだ。お前ごときの誘惑に負けるわけがない。

僕は立ち上がった。そしてしっかり歩を進め、ゆっくり椅子に腰掛けた。

ふかふかだった。僕は再びベッドに座っていた。どうやら少しベッドのことを甘く見ていたらしい。こいつもなかなかやるじゃないか。

再度、立ち上がる。ゆっくりじっくりさつきより慎重に歩き、そしてずどんと一気に腰を落とす。
ふかふかだ。

僕はさすがに怖くなった。そしてはつきり気がついた。このベッドは意志を（それも真っ黒な悪意を）持っている。いや、非科学的な考えかも知れない。こんなオカルトじみたことを言うとかバカにされると思う。でも、そうじゃなければなぜ僕は何度もベッドに腰掛けていると言うんだ？ こいつは意志を持って動いている。そうとしか言いようがない。ベッドを壁にぶん投げてやろうと思ったがさすがにそれは出来ない。自分の腕力のなさを呪った。

しかし僕はそんなオカルトベッドモンスターに屈し、寝てしまうようなことはしなかった。そう、僕は反撃に出た。つまりベッドで横になって勉強してやることに決めたのだ。勉強は椅子でしか出来ないわけではないということを知らしめてやる。この反撃にはベッドも太刀打ち出来まい。僕は意気揚々と立ち上がり、机の上から目的のものを取った。ついでに部屋に入ってきてしまったゾンビの親子に向かって聖書の一節を読みつけて退散させ、ベッドへ豪快にダイブした。

ふかふかの上で、ようやく僕は教科書の一ページ目を開いた。

はじめに神は天と地を創造された。

なるほどそうか。僕はてっきり神が一番最初に創ったのは水素とかヘリウムだとかそういう気体の類だと思ってた。勉強してみるもんだ。

僕は聖書を壁にぶん投げた。

まさか教科書までもが意志を持ち僕を邪魔するとは（どう考えても教科書が動いて聖書とすり替わったとしか思えないだろうこれは）。もしかして僕は数学を勉強してはいけない人間なのか。僕が数学を習得すると何か世界にとって悪いことが起きるのか。だから神が僕を数学から退けるのか。それともただの神の悪ふざけなのか。わからない。わからなかったので悩みぬいたあげく寝た。

強い日差しで目が覚めた。朝が来た。時計を見る。が、ぶっ壊れてて時間がわからない。朝のお祈りのために聖書を読む。が、インクが滲んでて字がわからない。いやこれは僕が目が潤んでるのか。

涙で。あくびの。

結局もう何も出来ないなので制服に着替えてかばんだけ持って急いで家を出た。

無論、通学路も数々の甘い誘惑と姑息な罍で溢れていた。テレビ、冷蔵庫、雑誌、新聞、おやつ、犬、遊びに行こうと昨夜より必死に誘う友人、早く寝ろと叱る昨夜より半透明になった父さん、昨夜見たのよりでかいムカデ、いや俺の方がでかいと喋るカマドウマ、ゾンビ、バンビ、バンビのゾンビ、カマドウマのゾンビなどなど。あと空襲警報が二、三回鳴った。それでも僕は全てを振り切って学校へと走った。全てはテストのために。僕のこの執念。

「はいじゃあテスト始キーンコーン」

教師の声に重なってチャイムが鳴り、予定通り九時ちょうどに数学のテストは始まった。

教室中からカリカリという神経質な筆記具の音が一斉に響きだす。僕も急いでシャーペンを構える。このテストにかける情熱では僕はクラスの誰にも負けないはずだ。だから僕は解く。

第一問。カマドウマの絵を描きなさい。

問題はこれ一つだけ。僕は頭を抱えた、と同時に神に懺悔した。もはやこの問題が数学の分野でないことなんてどうでもいい。僕は神を疑ってしまった罪人だ。神は僕にテストでいい点を取らせるために、数学を勉強させずその代わり何度もカマドウマと鉢合わせさせてくれていたというのに。それも細部がよく見えるように犬みたいにでかいサイズのと。でも、僕はそんな神の善意を理解しなかった。結果、全然カマドウマの絵が描けないのだ。脚が何本だったかもわからない。顔がどういう感じだったかもわからない。僕はシャーペンをぶん投げた。

そこでようやく気づいた。僕はカマドウマを意図的に見ないようにはしていたのだ。だって気持ち悪くて嫌だから。普通のだって気持ち悪いのに、でかかったり喋ったりゾンビだったりするのは余計気

持ち悪いから。結果、一回も直視してこなかった。そんな僕の姿勢が見事に悪い結果を招いてしまった。後悔してもしきれない。ああ。

嫌だ嫌だと言って直視せず目を背け避けていたらテストでいい点なんてとれない、という話。ああバカらしい。

心中コンテンポラリーデイズ

「ねえ七月くん、心中しない？」

昼休みの教室。いつもどおりぼんやり窓の外を眺めていたら背後からそんな物騒なことを言われた。振り返るとなんだかやたら元気そうなショートカットの女子が立っていた。

「えっと、誰？」

「あ、あたし一ノ瀬^{いちのせ}。一ノ瀬千歳^{ちせ}、隣のクラスの。はじめましてー」
「あうん。はじめまして」

屈託なくにこにこ笑うその口もとからは、ちらちら八重歯が覗いている。見れば見るほど健康少女っぽい。多分陸上部とか女バスとかだろうなあ部活。

「えっと、で、なに？」

「うん。心中しようよ、あたしと」

「はあ」

一ノ瀬さんは笑顔でぐいぐい僕の腕を引っ張る。この積極性と明るい笑顔からは全然自殺願望が見えてこない。

「あの、えっと一ノ瀬さん」

「あ、千歳でいいよー」

「うん、いや、一ノ瀬さん」

「なに？」

「えっと、なんで僕？」

「うーん」

一ノ瀬さんは僕の隣の席（佐藤さんが転校してからいまだ空席だ）にどっかり座って肘をつき、しばらく宙を仰いだあと、

「優しそうだから」と言った。とってもありきたりな感じはするけど、言われて悪い気はしなかった。ていうか普通に嬉しかった。

「あのね、みんな言ってるんだよー、あたしのクラスの子」

「え、何を」

「心中するなら相手は七月くんだよねーって」

何を話してるんだ隣のクラスの女子たち。てかこれは僕モテてることだろうか。なんかあんまり嬉しくないなあ。

「で、他の子が七月くんと死んじゃう前に早めに声かけなきゃって急いできたの」

「はあ」

「あ、もしかして、もう相手決まっちゃってるとか……？」

「いや決まってるじゃないけど」

「よかったー」

露骨に嬉しそうな様子を見せる一ノ瀬さん。

「ね、じゃあ、あたしと心中しよう」

「え、うーん」

こんなな目をきらきらさせて僕と死にたいなんて言ってくれるとは、嬉しいを通り越して正直ちよつと不気味だ。ていうかこの子、うんって言ったたら今すぐ死ぬんだろうか。そんなデンジャラスな精神状態には見えないけどなあ。

「どうする？ どういう死に方にする？」

「あ、えーっと一ノ瀬さん、それって急ぎなの？ 返事は今すぐじゃないと駄目？」

「え、いや、ううん。……でも出来るだけ早めに返事欲しい」

うーん。こう潤んだ目で見つめられると、今すぐ返事しないと悪い気がしてしまう。こんな普通に可愛い子が他でもない自分を選んでくれるのに何を悩んでるんだ僕は。いや、でも一生に一度の選択なんだからここは慎重にいかないと。うーん。

僕が無言でじっと考えていると、昼休み終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。それを合図に一ノ瀬さんはため息一つつくと重々しくゆっくり立ち上がり、教室から出るとぼとぼ歩き始めた。その背中に向かって慌てて呼び止める。

「あ、一ノ瀬さん」

「え？」

振り返った彼女の表情からは、最初に僕に見せた健康優良児的笑顔はすっかり消えていた。なんだか罪悪感。

「えっと、一つ訊きたいんだけど」

「なに？」

「一ノ瀬さんは、えっと、その、僕が好きってことだよね？」

我ながらあまりに恥ずかしい質問だったので、最後の方はかなり小声になってしまった。

一ノ瀬さんは数秒間、じーっと僕を見つめたあと、

「ううん」

と小さく首を振り、教室から出て行った。

残された僕は国語辞典を取り出し、急いでページをめくった。

心中。相愛の二人が一緒に自殺すること。情死。転じて二人以上で一緒に自殺することにも用いる。

肩の力が大きく抜けた。僕はてっきり心中っていうのは恋人同士で死ぬこと限定だと思っていた。僕の考え方は古かったのか。現代社会ではもう気持ちとか情とか関係なく、ただ誰かと一緒に自殺することを全部心中って言っちゃうわけだ。これを知ったら門左衛門は泣くだろうなあ。

とにもかくにも一つ結論が出た。別に僕はモテているわけではない。「好きだから」とかじゃなくて「誘えばすぐ一緒に死んでくれそう」みたいなふわふわした理由で選ばれたんだろう。隣のクラス的女子からなんとなく手ごろな男に見えてるんだ僕は。なんか考えててだんだん腹が立ってきた。僕ならお人よしでバカっぽいから簡単に引っ掛けられると思ったのか。誘えばはいはい死ぬと。遊びで心中するにはもってこいだと。うわ。

「それは違うよ七月くん」

放課後、再び隣にやってきた一ノ瀬さんは僕のほとぼしる不満を聞いてそう言った。

「いや、まあでも、そんな風に思わせちゃったあたしが悪いね、ご

めんね」

ぺこん、と心からすまなそうに頭を下げる一ノ瀬さん。クラスの連中はみんなさっさと帰ってしまっていて、あっという間に教室は僕たちだけになっていた。

「でもあたしも、別にそんな軽い気持ちで言ってるわけじゃないよ」
まあ、そりゃ軽い気持ちで自殺しちゃ駄目だ。命は大事にしないきゃ。

「じゃあ一ノ瀬さんは、本氣ってこと？　僕と心中したいっていうのも」

「もちろん」

強く頷く彼女のよどみない目。訊いってなんだけど、なんか恥ずかしい。

「だって七月くん優しそうだし、それなりにかっこいい方だし、死に方とかも一緒に真面目に考えてくれそうだし、それに、あ、これが一番大事なんだけど」

「うん」それなりかあ。まあ喜ぶべきではあるよなあ。やったー。

「例えば一緒に首吊ってあたしが先に逝っちゃったとしても、一人でずるして途中で縄解いたりしないので一緒に死んでくれそうだし」

「……はあ」

「飛び降りとかして万が一打ちどころ良くて七月くんだけ助かって、後追ってきちんと死んでくれそうだしお腹とか切って」

一ノ瀬さんはまっすぐ僕を見つめて熱弁する。果たしてこれは僕は評価されてるんだろうか。飛び降りした後引き続き切腹する自分を想像するとなんだかシュールだ、すごい死にたがりみたいで。切腹でも死ねなかったららはらわた出したままもう一回飛び降りしたりして。

「ねえ聞ってる？」

「あ、うん聞ってる」

「じゃあ、あたしの気持ち伝わった？」

「うん、まあ」

「じゃあ死ぬ？」

「それはまだちょっと」

「うーん、そっかあ、うーん……」

とたんに一ノ瀬さんは電源がオフになったみたくしょんぼり黙り込んでしまった。

「あ、なんか、ごめん。なんか」

「ううん別いいんだけど……他の子に取られちゃわないか心配だなーって」

「いや、そんな心配いらないってば」

「じゃあ、もし心中するなら迷わずあたし選ぶって約束してくれる？」

「え、はあ、うん」なんだこの特殊な会話。

「ほんとに？」

「まあ」

「ほんとのほんと？」

「ほんとのほんとっていうか、まず僕を奪い合うような状況が来ないから」

「来るよ絶対」

「いやいや」

「来るよ絶対」

翌朝、教室に入ると僕の席の周りに二十人ぐらいの人ばかりが出ていた。

「なにこれ」

そう呟いた僕を見つけるや否や、あっという間に人ばかりが僕に群がった。

「七月くん、私と一緒に死んで」

「お願い、私と飛び降りて」

「私、死に方は七月くんに任せる」

「一緒に手首切ろ。ナイフ持ってきたから」

「私もう切ってきちゃったから七月くんも早く自分の手首切って」

「七月くんの首周りにぴったりの縄、編んできてるの」

「七月くんの致死量ぴったりの砒素、用意してきてるの」

「七月くんが絶命するのにぴったりの電圧のスタンガン、買ってきてるの」

「俺、男だけど一緒に死のう」

「七月、先生と一緒に死んでくれ」

これでもかと浴びせられる死の誘い。四方八方から引っ張られる腕、足、首、体。目の前に次々差し出されるナイフやら斧やら日本刀。僕はたまらず叫ぶ。

「ちょっと、あの、ちょっとみんな聞いて」

「七月くん」

「七月くん」

「首を」

「腹を」

「血が」

「死ぬ」

「聞いて落ち着いてみんな」

「七月くん」

「七月くん」

「私と」

「私と」

「私と」

「私と」

「いいいいからあ聞けえっ」

僕は机の上に飛び乗りあらん限り叫んだ。

しんと静まり返る。ゆっくりチャイムが鳴り始める。

「……………えっと、まず、僕の考えとか気持ちを聞いてもらいたいんだけど」

虚ろげに僕を見上げる人々。関係ないクラスメイトもみんな僕を

見ている。

一息ついて。

「僕死ぬ気ないから」

言ってやった。周囲の口という口が、一斉にぽかんと開いた。

「いや、だって死にたくないもん全然。心中とかしないよそんな、バカバカしい」

四方を見下ろし見回しながら、一人一人にしっかり意思を表明する。長いチャイムがようやく鳴り終わる。

「あ。だからって無理心中とか、駄目だよ。そういうことしようとしてきたら殺すからね本気で。一人で逝ってもらうからね」

あらんかぎりの威嚇と殺意を体中で表現して見せる。ひるむみんな。

「……以上です」

僕は、ふうと小さく息を吐き、ゆっくり机の上から降りて席に着いた。周りの人ごみはそんな僕を見つつ、じわじわ、ぢりぢりと散りながら、口々に小さくざわめき出した。

「死なないんだ」

「がっかり」

「死にたくないんだ」

「信じらんない」

「せっかく切ったのに」

「意味わかんない」

「冷めた」

「チキン野郎」なんとも言え。僕は死なない。

自殺志願者の群れはぶつぶつと執拗に僕を罵倒しながら、ゆるやかに教室から消えていった。僕は勝った。

「ほら来たでしょー、奪い合うような状況」

放課後、やっぱり僕の隣に来た一ノ瀬さんは勝ち誇ったようにそう言った。

「でも七月くん、他の子選ばないで、死なないでいてくれたんだね」
「ああ、うんまあ」

「約束守ってくれてありがとう」

一ノ瀬さんは八重歯を覗かせて嬉しそうに笑う。約束守るために死を選ばなかったわけではないんだけど、まあいいや。

「あ、そうそう、あたしね」

「うん」

「明日からこのクラスに入るんだ。よろしく」

「ん？」

「いや、あたしのクラス、みんな死んじやったから今日」

「ん？ え？」

「七月くんにフラれた子みんな、クラスの男子とぼろぼろ心中してっちゃって。自棄になったのかなーわかんないけど」

「はあ」

「六時間目とかあたし一人で受けてたんだよ教室の真ん中で」

なるほど、どおりで放課後が近づくに連れて壁の向こうの生気を感じなくなってきたわけだ。もしかして僕、悪いことしちゃったんだろうか。罪悪感がむくむくと。

「で、明日から一ノ瀬は隣のクラスに入りなさいって副担任が。あ、担任も死んじやったからね。フツたでしょ？」

確かに一人、先生をフツた覚えはある。ああ罪悪感が。

「あ、でも七月くん、罪悪感感じることはないからね全然」

「うわ、見透かされた。いやでも、なんか実際僕のせいでみんな」

「違うよ。みんな本気じゃなかったってことだよ。死ぬ気ないって言われたらすぐ諦めて手近な男とほいほい心中なんてさー、むかつくよね。そんな半端な気持ちで七月くんに近寄んなっつーの」

一ノ瀬さんはぐっとこぶしを握り締めて、本当にちよつと怒りに体を震わせていた。それを見て、なんだか嬉しさを感じてしまった。変な話、一ノ瀬さんとなら一緒に死んでもいいかなあなんて思いも。
「で七月くん、死ぬ気にはなった？」

「いや、まだ全然」

翌日から彼女は宣言どおり僕のクラスに入った。そして大方の予想に反することなく、僕の隣の席に座ることとなった。

「死ぬ？ もう死ねる？」と授業が終わる度に笑顔で尋ねられたり「早く死のうよー」と書かれたちっちゃいメモが授業中配送されるようになったけど、僕はまだまだ元気に生きています。かしこ。

輝くな、君は美しい

なんてことのない普段どおりの朝だった。僕は平々凡々、いつもどおりの時間に校門をくぐった。さあこれから特筆すべきでもないような授業が始まる、とか考えていたとき。

「それ、髪、セットしてるの？」

背後から鋭い一声を浴びせられた。振り返るとでかでかとした腕章を付けた、なんだかぱっとしない感じの女子と男子。ああ、風紀委員か。朝から生活指導、まったくもってご苦労なことだ。

「セットしてるでしょそれ」

「はあ、まあ軽く」

つんけんした表情で高い声を上げる女の子。男の方は無言で僕をじとーっと睨みながら距離を狭めてくる。なんだなんだ。髪セットするぐらい紳士のたしなみだろう別に。

「そういう個性を出そうとしちゃ駄目」

「いや別に個性ってほどでもないよ」

「鈴木君、やっちゃって」

「了解」

了解の「い」の音が聞こえるかどうかぐらいの瞬間には、僕は頭から水をかぶっていた。髪の毛からぼたぼた垂れる雫とぐっしより濡れた体。鈴木君と呼ばれた男子の右手にはバケツがぶらぶら揺れている。全然意味がわからない。

「えと……なにこれ」

「個性を消させてもらったの」

「は？」

「あ、言い遅れたけど私たち、これだから」

そう言って、二人は自分たちの腕章を僕の眼前にずばっと突き出した。わざとらしいほど息ぴったり。その腕章にでかでかを書いてある文字は。

「没個性推進委員会」

「そ、覚えといてね。義務教育に個性なんか必要ないんだから」

女子は勝ち誇ったようにそう言い放つと、鈴木を引き連れ颯爽と校舎へ歩き去った。まだ僕は全然意味がわからないままだった。

ぼたぼた水滴を垂らしながら着いた教室には、僕と同じようにびしょ濡れの男子がぱっと見でも十人ぐらいいて、床板が水拭きした直後みたいに変色していた。濡れた男子たちはみんな、一様に腑に落ちてない表情で教室内をうろうろしていた。なのでそれを見習って僕もうろうろすることにした。

「七月、お前もやられたの？」

素潜りでもしてきたのかと思うほど水分を帯びた三田^{みた}が、僕に近寄り声を掛けてきた。

「三田、お前、すごいな」

「いや今日さ、髪いじってたらちよっと調子づいてきちゃってソフトモヒカンの感じにしてみただけどき、そしたらこれだよ。

バケツで水ぶっかけられてその後ホースでびゃーってやられて」

「なるほど」バケツ一杯じゃ個性が消え切らなかつたんだろうなあ。

「七月、あいつらどこのクラスの誰かわかる？」

「うーん、男の方は鈴木って名前みたいだったけどね」

「俺、あいつら見つけてぜってー痛い目見せてやろうと思って」

「そか」

三田が息巻く気持ちもよくわかる。気持ちが少し冷静になった今、僕だってあいつらに抗議なり報復なりしてやりたいと感じる。でもなあ。なにぶん没个性的でどこにでもいそうな顔立ちの二人だったし、三田の捜査は難航するだろうな、きっと。という僕の予想は大きく当たったらしく、

「七月、あいつらほんとにここの生徒か？ よその学校の奴だったりしないか？ もしくは幽霊とか」

「よしよし落ち着け」

ちよつと時間が空く度に校内中を血眼で走り回っていた三田は放課後、僕に向かってそう音を上げた。とりあえずかわいそうだったので頭をなでてやった。

実は僕は僕で、没個性推進委員会がどんな奴だったか覚えてる奴がいないか、ずぶ濡れ被害を受けた生徒たちに地道な聞き込み調査を展開していたのだ。が、結局失敗に終わった。顔も背丈も特徴も誰一人としてはっきり覚えていなかったのだ。かく言う僕も覚えていないんだこれが。恐るべし没個性。

次の日、その次の日と、日を追うごとに被害を受けた生徒は増えていった。髪をざくつと切られた奴なんかさらにいたし（それから考えると水をぶっかけられるぐらいで済んで僕は幸運だった）、またある女の子なんかは鞆に付けていたお気に入りのだでかい熊さんのストラップをバーナーで燃やされたらしい。そのせいで黒く焦げた鞆は逆に強烈な個性を放ってしまったのだとか。

「七月くん、切腹って個性ないと思う？ 正直に言って」

すっかり僕のクラスに馴染んだ一ノ瀬さんが、登校するや否や声を荒げて僕にそう言い、椅子ではなく机にどかっとな腰掛けた。しかも僕の。

「なんのこと」

「下駄箱で変な奴らがいきなり、どんな死に方が一番理想なのーとか訊いてきたのね」

「うんうん」

「だからあたし、色々あるけど一番はやっぱり切腹ってばしつと云ってやったの」

「うんうん」

「そしたら、それは無個性でいいねーって」

さて意気揚々と腹を切りたがる女子中学生のどの辺が無個性なのか。

「この国のオーソドックスな自決の仕方だから切腹はありきたりだ

って言うの。信じられる？ あたしもうすごい侮辱された気分ですー」

なんで侮辱された気になってるのかその感情の流れはわからない。あと没個性推進委員のずれた日本観を持つ外人的フジャマゲイシヤハラキリな価値観もまたよくわからない。でもただ一つわかっていたのは、一ノ瀬さんのその雪辱を晴らす術は僕の中ですでに整っているということだ。

「なに笑ってんの七月くん。え、切腹を侮辱」

「してないです」

待ちに待った昼休み。僕は鞆を持ってトイレへ走った。

さて数分後。

僕は真っ赤なワンピースを着て、テンガロンハットをかぶり、バカみたいにでかいサングラスを掛けてトイレから登場した。生徒たちの好奇の目線をいともせず（というかサングラスのせいによく見えてなかったただけだけど）僕はしゃなりしゃなりと優雅に廊下を闊歩した。

「七月、お前、なんか悩みあるなら言ってくれよ」

途中出会った三田が僕の肩をがくんがくん揺すりながら言った。

うん、いい友達だ。

「違う違う。三田、僕わかったんだよ」

「なにがだよ」

「どこにいるのかわからなくても、こっちが個性出せば敵は向こうから食いついてくるはずだって」

三田の眉がみるみるハの字に変化していくのが見えた。僕の言っている意味がぴんと来てないらしい。

「まあとにかく。いつぞやの仇は僕がびしっととってくるからね」

「七月……いつでも頼っていいからね」

僕はよき友と意思が疎通しきれない歯痒さを感じながらも、その場を後にした。僕には行くべき場所があったのだ。校内で一番、個性ある場所。

大きな椅子にどっしり腰掛け、ものものしい机の上に足をどんと預けることほんの数分。重い扉の音と共に、奴らはついに現れた。そして僕に予想通りの第一声を投げかける。

「個性的過ぎ」

「そうかな？」

僕はわざととぼけてやった。そりゃ個性的過ぎるだろう。この部屋はなんてったって天下の校長室だ。こんなところでこんなかぶいた格好してるわけだから、もう個性的というか変だろう僕は。

「それ脱いで、ここから出なさい」

「やだね」

「鈴木君、やっちゃって」

「了解」

言うが早いかずかずか僕に近づいてくる鈴木。ひるまずそこで僕は立ち上がる。

「委員長さん。君は僕がこれ脱いで部屋から出りゃ無個性になると思ってるんだね」

「当たり前じゃない」

「ふうん。委員長さん、名前は」

「田中」まあそんなもんだとは思った。

「田中さん。僕の名前知ってる？」

「知らないし興味もない」

「七月って言うんだよナナツキ」

田中さんの息を飲む音がはっきりと耳に届いた。僕からワンピースを脱がそうとしていた鈴木動きも止まった。僕は余裕綽々で赤ワンピースその他全部脱ぎ捨ててやった。

「没個性推進委員会は、どうやって僕のこの個性を潰すのかな？」

僕が喋り終わる前に、田中さんは唇を噛み締めながらものすごいスピードで走り去っていた。それを追って鈴木も走り、部屋から消えた。勝った。僕は勝利の余韻を味わいながらゆっくり再び椅子に

腰を下ろした。

「君は、パンツ一丁で、私の椅子に座って何してるの」

「あ、すいません」

入ってきていた校長に怒られ僕はすぐ退散した。

翌昼休み。僕はまたしても真っ赤なワンピースで校長室にいた。

「こんにちは七月くん」

「おい、あれ、どういうことだよ」

ドアが開いた瞬間、僕は食って掛かった。田中さんは昨日の悔しそうな顔はどこへやら、むしろくちや余裕の笑みを浮かべていた。なぜか隣の鈴木も笑顔。

「どうということってそのままじゃない。私の父とあなたの母が結婚するっただけでしょ」

「だけで済まされないだろそんな」

昨夜、夕食の席で母が突然、田中という男性と再婚するかも知れないという爆弾発言と、自分が数時間前にどれだけ運命的な出会いを成し遂げたか顔を赤らめて僕に語りだしたのだ。その時はさすがに度肝を抜かれて、僕はちよつと泣いた。

「没個性推進委員会の恐ろしさがわかった？」

「恐ろしさっていうか、ほんとに結婚しちゃったら田中さん、僕と兄妹になるんだよ？」

「いとわない」

いだよ。というかまあ別に僕もいとういとわないの議論をするためにわざわざ再度ここにかぶき者として登場したわけじゃない。

「田中さん」

「なに、弟」兄妹だからって弟って呼ぶのはどうなんだ。いやまだ兄妹ではないけど。

「僕、下の名前、那由他っていうんだけどさ」
息を飲む田中さんと合わせて息を飲む鈴木。

「いや、それも……私たちが、どうにか、無理やり改名させたりす

るから」

「うん、いやそれはそれとして、僕が話したいのは別の話っていうか」

「なに」

「個性的っていうのはさ、少数派かどうかっていう判断で成り立ってるわけでしょ二人の中では」

僕は机に肘をつき、前に体をぐっと乗り出して二人に語りかけた。

「どういう意味」

「たとえば僕の名前、那由他っていうのは珍しい、数が少ない名前だから個性的、そう思ってるわけでしょ。逆に数が多いのは一般的だって」

「……そうね」こくりと頷く田中さん。

「じゃあさ、生きてる人と死んでる人、どっちが一般的？」

「は？ 生きてる人に決まってるじゃない」

「うん、違うんだよねそれが」

「どこがよ。その辺見たって死体なんてめったにないじゃない」

「そうじゃなくて、もっと大きな視野で見えてみてよ。いい？ 人類の歴史から見て、今現在生きてる人間と、今までに死んでいった人間、どっちの方が数が多い？」

二人は思案し、みるみる顔色を変えていった。

「うん、実はまだ死んでない僕らの方が、広い視野で見れば少数派ってわけ。生きてるほうが珍しいんだよ変な話」

ちなみにこれは一ノ瀬さんが僕を自殺に誘うときに論じた話だ。死んでる人の方が多いんだから死んだ方がいいよっていう、日本人の民主主義性を絶妙に突く論法だった。いや、詭弁だけどね。

「でも田中さん、だからって全員が死ぬわけにはいかないでしょ。

僕の名前の話もそうだけど、細かいこと言っていたら全員が全員一律の没個性になるなんて不可能なわけ。個性があつてこそ没個性が輝く、そして逆も然りなんだから。だからさ、そんなバカな活動なんかもう辞めて、今この時代に生きてるっていう個性と喜びを深

く噛み締めて、一人ひとり空の星のように違う輝きを見せていくために、僕らは手を取り合ってこの学びやで勉学に勤しんでいくべきなんじゃないかな」

僕は完全に己の饒舌っぷりに酔っていた。話してる内に感極まり噴出した涙を拭って目を開けると、そこに二人の姿はなかった。

「君は、おかしいな服装だが、良いことを言うね」

「あ、ありがとうございます」

入ってきていた校長に拍手を送られながら、僕はすごすご退散した。

さてそのあと没個性推進委員会は怎么样了かというとても単純で、授業中に二人とも教室で切腹して死んだそうだ。普通ってことで授業中の教室を選んだんだろうけど、そこに切腹が入ると化学反応が起きるということまで気が回らなかったらしい。

結果的に、二人はとっても個性的なカップルとして（心中だと思われたらしい）我が校のみならず全国に名を馳せることになってしまったんだとか。なんともバカバカしい結末。

「切腹、先越されちゃったよー」

と一ノ瀬さんがびーびー騒いでいたが、まあそれはまた別の話と
いうことで。

頬が腫れてサーカスが遠くへ行った話

私サーカスに売られちゃったんだ、と言う佐藤さんはその言葉の薄幸さを微塵も感じさせない笑顔だった。だから僕は、へえ、と軽く返した。もし彼女が深刻げに言ったなら僕も、そうなんだ、と深刻げに返しただろうけど。

ホームルームがもうすぐ始まる。朝のこの時間は、いつも海みたいに教室がざわつく。僕の隣の席で、佐藤さんは静かに、にこにこしていた。貝みたいだった。

「七月くんって彼女いるの？」

「いないよ」

「じゃあ一枚だけあげるチケット。今週の日曜五時からだから」
差し出された紙切れ。

『ミラクル小林大サーカス団』

僕はその薄汚れたチケットを、ゆっくりポケットにしまった。

放課後。

僕と佐藤さんは公園にいた。

手伝って、と言われたので、手伝うことにして、ここに来た。

空中ブランコの練習。

「じゃあ練習するから見ててね」

彼女はそう言い、ブランコの椅子にゆっくり腰掛けた。空中じゃない、普通のブランコ。

きこきこ、漕ぐ佐藤さん。

僕は、ただじっと見守った。

夕日がブランコに長い長い影を作っていた。

それからしばらくして僕も、彼女の隣に座って、漕いだ。

意外と楽しくて、意外と楽しいね、と言うと、ね、と彼女は小さく笑った。

ブランコと空中ブランコの違い？ うーん。空中ブランコは、椅子がないよね。棒を掴んでぶらぶら漕ぐから、空中ブランコだもんね。でも普通のブランコは椅子があるでしょ？ だから安定感が違うのかなあ一番。安心感？ 安心感。うん。

僕と佐藤さんは、毎日、放課後、公園で空中ブランコの練習をした。

彼女はただ黙って、きこきこ、静かに漕いだ。遠くを見ていた。

僕は、何も言わないで、ただ一緒に、きこきこ、静かに漕いだ。毎日毎日、夕日はあつという間に落ちた。ブランコみたいだなあ、とそれを見て思っ、何をどうブランコみたいだと思っ、たのかわからないけど、でもやっぱり夕日はブランコみたいに見えた。遠くを見つめていた佐藤さんが、ブランコみたい、とぼつり呟いたのを聞いて、あ、やっぱり夕日はブランコみたいなんだ、と嬉しくなったけど、でも彼女が本当に夕日に対して「ブランコみたい」と言ったのかはわからないということにすぐ気付、それで僕は、何も言わなかった。

もしかしたら彼女は、自分に対して、そう言ったのかも知れないと思った。

「でもなんでサーカスに？」売られたの？ という疑問を朝の教室でぶつけた時、ぶつけてしまった時、彼女は少し、黙った。一瞬、笑顔が失くなっていったのを、僕は見た。

「うーん。理由は色々あるんだけど、お金に困ってたからね、うち」「そか」

サーカスって好き？ 私、小さい頃、小学生ぐらいかな、お父さんとお母さんに連れて行ってもらったことがあって、すごく楽しか

ったの覚えてる。テントに入って、照明が照って、ぱーって、ぱあーって広がる感じ。あ、見て見て七月くん。腕、ほら、思い出して鳥肌立ってる私、ふふ。でもね、何見たかはあんまりはつきり思い出せないんだあ。ライオンとかピエロとかナイフ投げとか子馬とか、見たのかなあ、確か。あ、そうそう、お父さんがサーカスの団長に指名されそうになって！ 思い出した！ ほら曲芸のお手伝いで！ お母さんと私で、一緒にお父さんに行け行けーって背中押してお父さんがやだやだって子供みたいに、あはは。ふふ、楽しかったなあ、サーカス。えへへ。楽しかったな。

「また明日もよろしくね」

佐藤さんは去り際に、いつもそう笑顔で言った。

僕はいつも、うん、と返した。

明日も、その明日も、ずっと毎日、並んでブランコを漕いで、永遠に続きそうな日常だったけど、永遠なんて当たり前だけやっぱり世の中にはなくて、ブランコに乗る僕らの放課後にはあっという間に終わりが来た。

日曜日。

チケットを握り締め、僕は会場へ向かった。

チケットは、言うまでもなく大学ノートの切れ端だ。手渡された時からそんなことわかってた。サインペンで丁寧に書いてある地図を見ながら、僕は歩いた。

可能性。

可能性を僕は想う。

地図の場所、僕もよく知る住宅街の中に、小さなテントが建っている。僕は信じられなくて頬をつねる。夢じゃない。テントに入る。お客さんがたくさん。僕はまた頬をつねる。現実。ほどなく開演。僕は、ライオンとかピエロとかナイフ投げとか子馬とかを、見る。楽しむ。拍手する。団長らしき男が出てきて言う。「ラストはお待ち

ちかね、空中ブランコ」高いポールの上。照る照明。佐藤さん。なぜか体操服のジャージで、僕はもっと派手な格好をさせてもらえば良かったのと思う。「それではどなたかに彼女のアシスタントを」団長らしき男と目が合う。彼が笑う。僕は座ったまま動かない。佐藤さんと佐藤さんのお母さんが、行け行けと僕の背中を押して笑う。僕は子供のように嫌がる。「じゃあそこのおぼっちゃん」一人の少年が指名される。少年は悠々と高いところへ上がって行く。僕はなんだか、ほっとしたような残念なような気持ちになる。佐藤さんと少年は、高い高いポールの上、あっちとこっちで向かい合う。セーの。

佐藤さんの声が僕の耳に届く。

宙に舞う彼女と目が合う。

高い、高い、高い空中を、彼女は跳ぶ。

拍手喝采。拍手喝采。

拍手喝采。

喝采。

実際の、本当の、僕が見た彼女の空中ブランコは、そんなに高くなかった。空中ではあったけど、何十メートルとかじゃなくて、数十センチ。彼女の横に雑に倒れている椅子くらいの高さ。それに彼女は、揺れてはいたけど、僕が想い描いていた空中ブランコみたいに激しい揺れではなくて、きこ、きこ、という、それこそ公園のブランコに近い、緩やかな揺れだった。でも、彼女は確かに空中ブランコを成功させていて、僕は拍手こそしなかったけど、ただの一秒も目が離せなかった。彼女はあまりにも穏やかな笑顔で、見に来てよかった、と僕は心底思った。

彼女の真っ白い体が揺れなくなった頃、僕は会場を後にした。

うらびれた木製のアパートの二〇一号室。

これが本当のほうのサーカスの会場。

汚くて、殺風景で、生活感がまるでなくて、ビールの空き缶や一升瓶が嫌っていうほど転がっている、そんなサーカス小屋だった。玄関の古茶けた木の戸は、閉めても閉めても、きいきいと笑うみたいな音を立ててだらしなく開いて、それで僕は、サーカスなんて嫌いになった。

夕日。公園。ブランコ。

「七月くんが練習付き合ってくれたおかげ」

佐藤さんは、にこにこしながら言う。

「そか」

僕も、出来うる限り、笑顔を返す。

「それより私、七月くんに大事な話があって」

「なに？」

「さよならなの」

「さよなら？」

「サーカスだから次の町に行かなくちゃだから、だからさよなら」
風がぶうぶう吹いて、ブランコの椅子がきいきい揺れて、僕はただ、自分の頬を、ありったけの力で、腫れるくらい。

頬が腫れてサーカスが遠くへ行った話（後書き）

「サーカスが来て頬が腫れた話」を、音楽をリミックスするようにしてみたくて、再構築して少し新しい話にしてみました。

とまらない悲しみと悲しみと悲しみ

彼女が出来た。

彼女は悲しいことが好きだった。

笑うより思いきり泣くことのほうがストレス解消効果がある、と何かで聞いたことがある。それを知ってか知らずかは知らないけど、彼女は悲しい涙を流すのが大好きだった。

付き合ってから初めてのデートは映画。事故で死んだ飼い主の帰りをずっと待ち続けた子犬が、主人を見つけようとあちこち旅して最終的に死んじゃう話だった。ミニチュアダックス彼女はわんわん泣いた。湧き水みたいだった。泣きながら、口元は少し微笑んでいた。

次のデートも映画だった。戦争で死んだ夫の帰りをずっと待ち続けた奥さん（寺島しのぶ）が、主人を見つけようとあちこち旅して最終的に死んじゃう話だった。ドッペルゲンガーばりに似た内容だった。それでも彼女はぶわんぶわん泣いた。ダムの放水みたいだった。泣きながら、ふふ、と時々ま静かに笑っていた。

次のデートは動物園だった。僕らは目の前で一頭の小猿が死ぬのを見た。飼育委員の話によれば、この小猿は母親と生き別れになり、旅をして探し回っていたところこの動物園で保護され、でも保護の甲斐なく衰弱死してしまっただけらしい。これはきつと映画になると僕は確信した。彼女はぶるわんぶるわんと水の神様みたいに泣くんだろう、と書いていたけどそうでもなく、ただ静かに、ぽたぽた涙をこぼすだけだった。

でも、その涙が一番、彼女にとって快感だったらしい。

ある日の放課後、二人きりの教室で、彼女は僕に言った。

「死んだ猿を超える悲しさが欲しいの」

今日のお昼何食べようか迷ってるの、ぐらいの口調だった。

「七月くんのこと、私、好きだから……七月くんが悲しんでるとこ見たら、きっと今までで一番泣いちゃうと思うの」

そんな恥ずかしいことを臆面もなく言う彼女はもうめちやくちやに可愛くて、僕はどうしてもやにやしてしまった。

「七月くんは、何されたら、何が起きたら、一番悲しい？」

「え、うーん……」

結構、色々ある気がする。……たとえば。

「たとえば、君が別れようとか言い出したら、悲しいかな、うん」
二人きりの教室だから言える、ちょっと恥ずかしいせりふだった。

「じゃあ別れよう」

早かった。僕の「悲しいかな、うん」の「しいかな」辺りに被り気味で、彼女は別れを切り出した。もちろん僕は言い返す。

「え、いや、嫌だよそんな。これはあくまでたとえばの話で」

「別れよ」

「いや、だってさっき、僕のこと大好きだって」

「ごめんね」

彼女はさっさと教室から出て行った。一度も振り返らなかった。ぼっつん、と取り残された僕。窓から濃い夕日が差し込む。

そうしてそれから、次の日もその次の日も、僕が何を言っても彼女はもう耳を貸さなかった。本当に、別れたことになってしまったらしかった。こうして僕は一人になった。一人になった僕をちらちら盗み見て、時たま彼女はうつすら笑みを浮かべた。幸せそうな暗い笑顔だった。

（話はここで終わりです。ですが、この悲しい結末に納得がいかな
い場合、あなたは続きを読んでもかまいません）

……というように。

「別れることが悲しい」なんて言うときつと彼女はそれを実行する。
一瞬でそう思った僕は、出かかった言葉を飲み込んだ。そして、

「……家族がバラバラになることが、一番悲しいかな」

と寂しげに呟いてみた。別に僕の家庭は何の問題もなく非常に円満なのだけど、こういう家族大事にしていますみたいなさりげないアピールってきつと好感度アップだな、という下心あつての発言だった。

「……そっか……あ、なんか、変なこと訊いて、ごめんね」

彼女は申し訳なさそうに、俯いた。

「あ、ううん、気にしないで」さりげない笑顔を見せる。

「うん……でも七月くん、家族を大切に思ってるんだね。素敵だね」

ふわ、と彼女は笑った。好感度の上昇を肌で感じ、僕も笑った。

で、その夜。家で。

一階から悲鳴が聞こえた。慌てて、でもおそろおそろ、自分の部屋を出て階段を下りる。

リビングに入ると血の海だった。肉片の混じるその海の真ん中に、数時間前と同じ、制服姿の彼女が立っていた。包丁を握り締めた右手を僕に向け小さく振り、ふわ、と笑う。

「悲しい？ 七月くん？」

そう。

彼女は僕の家族を、バラバラにしてしまった。文字通りの意味で。

（話はここで終わりです。ですが、この悲しい結末に納得がいかな
い場合、あなたは続きを読んでもかまいません）

……家族の話っていうのも変かな、と思った。ので、出かけた言葉
葉を飲み込んだ。

やっぱりここは彼女に関係のあることを言うべきじゃないだろう
か。いや、べきというか、実際今の僕にとっては彼女に何かあるこ
とが一番悲しい。だから思うままに、

「もし君の笑顔が見れなくなったりしたら、それが一番、悲しいと
思う」

そう言った。言った後でちょっと照れくさくなり、僕は笑った。

彼女は少し黙って、考えるような顔をしながら、鞆を開いてシャーペンを一本取り出した。

そして勢いをつけて、それを自分のほっぺたに突き刺した。

「えあっ」

彼女が小さくそんな音を発する間に、右のほっぺたから入ったペン先はあっさり左側から顔を出した。真ん中で串刺しになり8の字みたいになった彼女の口から、ぼたりと一滴、血が落ちる。彼女はシャーペンの尻を握り、パンチでもするみたいに前方へぐいと押し引いた。ぶちぶち嫌な音を立てて口の端が広がり、彼女のほっぺたはほとんどなくなった。支えを失い、ぶらんと垂れ下がる顎。彼女はそれを両手で掴み、レバーでも引くみたいに下方向へ力いっぱい引っ張った。――ばきっ。

こうして彼女は、顔の下半分を壊し、笑顔を完全に失った。

（話はここで終わりです。ですが、この悲しい結末に納得がいかなかった場合、あなたは続きを読んでもかまいません）

「待って、今のなし！ 笑顔なんて見れなくても全然悲しくない！」シャーペンを鞆から取り出した彼女に、僕は大声でストップをかけた。

彼女はきょとんとした顔で僕を見た。じゃあ何なら悲しいの？

そう尋ねるような目。

「えっと……笑顔だけじゃなくて、君自身を見ることが出来なくなったら、僕は悲」ずぶ。

何かが潰れる音と共に、僕の視界の右半分は真っ暗になった。じんわり広がる熱と痛み。熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。

（この悲しい結末に納得がいけない場合、あなたは続きを読んでもかまいません）

「違う！ なし！ 見えなくなってもまったく悲しくない！ それより、えっと……君の声が聞こえない」
ぶす。

と、左耳の奥のほうから音がして、すぐ何も聞こえなくなった。みるみる広がる熱と痛み。痛い。痛い。痛い。痛い。

（この悲しい結末に納得がいかない場合、あなたは続きを読んでもかまいません）

「ああ違う！ だめ！ なし！ 見えなろうが聞こえなろうが全然悲しくない！ そうだ、君ともしこうして喋ることが出
ごしゅ。

目線を下にやる。シャーペンの下半分が、顎の下から覗いていた。どんより広がる熱と痛みと悔しさ。熱い。痛い。悔しい。ああ。もう。

（この悲しい結末に納得がいかない場合、あなたは続きを読んでもかまいません）

「なーし！ もう全部なーし！ とうか一回シャーペン置こう！
シャーペンは良くない！」

強引に彼女の手からシャーペンを奪い取り、窓を開け、空めがけて遠く遠く放り投げた。

それから、ゆっくり呼吸を整え、彼女と向き合う。

そして考える。「僕」とか「君」の話をするから良くない結末になるんだ。

つまりもつと、広い範囲での話をすればいい。

「僕が一番悲しいのは、たくさんの人が命を落とし、悲しみ、絶望するこの世界そのものだよ」

彼女は、ぽかんとした表情で僕を見た。そして、無言で教室から飛び出した。あんまり的外れな答えをしたせいで嫌われたのかも知れない。でも、それならそれでいい。結局これが一番、良い選択のはずだ。ふう、と自然にため息が漏れた。

翌日から、彼女は学校へ現れなくなった。

代わりに、僕の町に連続殺人鬼が現れるようになった。その独特の殺害方法から「シャーペンキラー」と呼ばれ、恐れられた。たくさんの人が命を落とし、悲しみ、絶望した。僕は大きく頭を抱えた。

（この悲しい結末に納得がいかない場合、あなたは続きを読んでもかまいません）

とりあえずまず彼女の鞆を開け、シャーペンをへし折り、窓からぶん投げた。

「あのね、先に言っておくけど僕はね、血とか見ても全然悲しくならないんだよ。いや、もう正直に言うけど、痛いこととか血生ぐさのとか大好きなんだ。だいつ好きなんだ。だから、流血沙汰になるようなことはやらないほうがいいよ、断固として」

「……どういう意味？」

「……まあ、いいや。それで、えっと、そうだな、僕が一番悲しいのは……」

一度、深呼吸する。思考をまっさらにする。目を瞑る。そして、ようやく。

ようやく、ひらめいた。

逆を言えがいいんだ。「別れるのが悲しい」と言うとな彼女は僕と別れる。「誰かが死ぬのが悲しい」と言うとな彼女は誰かを殺す。ということとは、つまり、一般的な悲しい概念にあるものと、逆のことを言えばいい。嬉しいこと、そうであって欲しいことを、言えばいい。

かっと目を見開き、僕は口を開いた。

「君が、僕の前で、こうやって生きてることが一番、悲しい」

解けた。そう確信した。口元が自然と緩み、笑顔を抑えることが出来なかった。

彼女は、僕をじっと見つめたまま、小さく口を開いた。

「……それ、死んで欲しいってこと……?」

「そうだよ」

堂々と返した。返してから、思った。

なんか違う気がする。そういうことじゃないような。

「———ひどい」

あ間違えた、と思う間もなく彼女は開けっ放しの窓へと走り、その四角い枠を飛び越えて、空に向かって跳んだ。

「……あ」

夕闇の中、落下していく彼女の体。数秒後。

ぐしゃ。

嫌な音が、はっきり耳に届いた。

最悪だった。

僕は、この最悪な最悪な最悪な結末を受け入れるしかなく、もう受け入れる以外には何もなく、ただ窓の外を見ながら、ぼんやり立ち尽くした。

（話はここで終わりです。もう続きはありません。あなたはどこかで、この話を読むのをやめるべきでした。あなたが読むのをやめていれば、この悲しい結末は避けられたのです。なぜ？ なぜあなたは、読むのをやめなかったのですか？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5664j/>

不可思議の前に七月

2010年10月8日14時00分発行